浦島説話の変遷

下澤清子

1 はじめに

日本の各地域で語られてきた数多くの昔話。その中でも、特に国民的な昔話の一つに、「浦島太郎」がある。この浦島説話が国民的昔話になり得た理由として、ひとえに学校教育による「浦島太郎」の普及ということが挙げられるであろう。明治から昭和にかけて、

昔々浦島は、助けた亀に連れられて、竜宮城へ来て見れば、
絵にもかけない美しさ。　（『日本唱歌集』[注1]所収）

という唱歌をはじめ、国語の教材として再三取り上げられてきた。

しかし、浦島説話に関する日本の各時代の文献を集めてみると、現在、私たちの知る昔話「浦島太郎」とは異なる浦島説話の存在に気づくことができる。そして、浦島説話は、おおよそ古代、中世、近代の三つの浦島説話に区分できるように思われる。そこで、古代、中世、近代の標準的な浦島説話を求め、日本の浦島説話は、いかに変遷してきたかを追ってみた。

尚、浦島説話には、記録によって伝えられたものと、口承によって伝えられたものとがある。記録として残された浦島説話と、口承の世界で生き続けてきた浦島説話とは、お互いに影響を及ぼしながら今日まで伝えられてきたのであろうが、口承の世界の浦島説話はその語られた地域社会で独自の展開を示している。それに、口承の世界のことであるので、その話が語られた時代を知ることも難しい。従って、民間伝承としての浦島説話を記録によって伝えられた浦島説話と区別し、私は記録によって伝えられた、すなわち、文献に残る浦島説話の変遷について述べたいと思う。

2 三つの標準型浦島説を求める過程

さて、浦島説話に関する文献であるが、古代（文献整理上、奈良、平安、鎌倉時代を示す）には浦島説話を記した多くの文献が存在する。その中でも、中心となるものは、浦島説話を詳細に記した現存する最古の文献である『丹後国風土記逸文』[注2]と、『万葉集』[注3]に

比較項目	丹後国風土記逸文	日本書紀	萬葉集	浦島子傳	續浦島子傳記	扶桑略記	水鏡	古事談
時	長谷の朝倉の宮に御宇しめしし天皇の御世（雄略天皇の御世のこと）	雄略天皇二十二年　秋七月		雄略天皇二十二年		雄略天皇廿二年七月	雄略天皇の御代	
場所	與謝の郡、日置の里。此の里に筒川の村あり。	丹波國の餘社郡の箇川（つつ）	墨吉	丹後国	澄江浦	丹後國余社郡		丹後國余佐郡
主人公の名前	水の江の浦嶼の子	瑞江浦嶋子	水江の浦島の子	水江浦嶋子	浦嶋子	水江浦嶋子	浦嶋ノ子	水江浦島子
釣のようす	獨小船に乗りて海中に汎び出でて釣するに、三日三夜を經るも、一つの魚だに得ず	舟に乗りて釣す	堅魚釣り　鯛釣り矜り　七日まで　家にも來ずて　海界を過ぎて漕ぎ行くに	獨乘レ船	獨乘二釣魚舟一。常遊二澄江浦一。伴二査郎一而陵二銀漢一。近見二牽牛織女之星一。逐二魚夫一而過二汨羅一。親逢二吟澤懷砂之客一。於レ是釣魚之處。	乘レ舟而釣。		

収められている「水江の浦島の子を詠む一首・短歌を併せたり」という長歌、及び短歌である。ところが、この二つの資料が語る浦島説話は六つの点において明らかに異なり、互いに別系統のものであると考えられる。そこで、両者以外の文献、すなわち『日本書紀』[注4]、『浦島子伝』[注5]、『続浦島子伝記』[注6]『扶桑略記』[注7]、『水鏡』[注8]、『古事談』[注9]を加えた計八つの文献を別表のように三十三項目について相互比較し検討した結果、『丹後国風土記逸文』の浦島説話を基本とする古代の標準型浦島説話を求めることができた。

次に、中世の文献として、『浦島神絵巻』[注10]『うらしま古絵巻』[注11]、『うらしま室町末絵巻』[注12]『うらしま奈良絵巻』[注13]がある。これらの絵

巻や奈良絵本の浦島説話を受けて、近世初期に渋川本『御伽草子』[注14]の「浦島太郎」が誕生したのである。そこで、私は渋川本『御伽草子』の「浦島太郎」を中世の浦島説話を代表するものとして扱い、それをもとに、中世の標準型浦島説話を求めた。

明治以後の文学者による浦島説話を素材とした数多くの作品を除くと、近代の浦島説話として、御伽噺の読本類の「浦島太郎」と、教科書に掲載された「浦島太郎」が挙げられる。近代の浦島説話の標準型を求めるにあたり、御伽噺の読本類の代表として、森林太郎ら四名の撰になる『標準於伽文庫』[注15]の「浦島太郎」を、また、教科書に掲載されたものの代表として、『小学国語読本』[注16]（通称『サクラ読本』）巻三の二十四「浦島太郎」を取り上げた。そして、この両者を比較しながら、近代の標準型浦島説話を求めてみた。

3　浦島説話の変遷

三つの標準型をもとに、古代、中世、近代の浦島説話の変遷を追ってみよう。三つの標準型の比較項目は、説話の筋を追って、①時②場所　③主人公　④発端　⑤亀との出会い　⑥放生　⑦異郷への誘い⑧異郷への道　⑨御殿のようす　⑩舅と聟　⑪異郷での歓待⑫異郷逗留　⑬帰郷の思い　⑭玉手箱　⑮帰路　⑯帰郷の時　⑰故郷のようす　⑱時の経過　⑲玉手箱を開く　⑳結末、とした。

a　説話の設定

初めに、浦島説話の設定は、古代では、①雄略天皇二十二年秋七月　②丹後国与謝の郡、日置の里の筒川の村③水江浦嶋子、となっている。ただ、『丹後国風土記逸文』では、さらに「此の人夫、早下部首等が先祖の名を筒川の嶋子と云ひき。為人、姿容秀美しく、風流なること類なかりき。」とつけ加えている。が、これらの特殊な記述を除くと、概して、古代では雄略天皇の御代に丹後国与謝の郡、日置の里の筒川に住み、おそらく海の魚を取って生活していた水江浦嶋子であったといえるだろう。

ところが、中世の浦島説話では、①昔　②丹後国　③浦島の子の浦島太郎・漁をして両親を養っていた、と変わる。すなわち、時代を示す「雄略天皇の御世」は消え、「昔」という一語に代わる。中世以前においても、説話の類は時代を「昔」として語っている。たとえば、『今昔物語集』（平安時代後期の成立）の冒頭は「今は昔」である。従って、古代では、浦島説話は説話というよりも、伝記、あるいは史実として記録されてきたのに対して、中世では、いわゆる御伽草子として語られるようになったと言えるであろう。

その御伽草子としての性格は、主人公の名前にも表われている。古代の「水江浦嶋子」に対して、中世では浦島という人物の子の「浦島太郎」として描かれ、二十四、五才の若者であったとしている。私たちの親しんでいる浦島太郎という名前は、このように中世に誕生したのである。

また、浦島太郎の住居も詳しくは述べられず、「丹後国に」と記されるに留ったが、「明け暮れ、海のうろくずを取りて、父母を養ひける。」と、孝養を積んだ若い漁夫として描かれている点に注目したい。この記述は、中世に新たに加えられ、近代の御伽噺の一部に残ることになる。

近代の浦島説話の設定は、①むかし　②（丹後の国の水の江）[注17]③浦島太郎・（漁をして両親を養っていた）となっている。時は「むかし」。主人公も浦島の子の浦島太郎という説明は消え、単に「浦島太郎」として登場する。『小学国語読本』巻三の「浦島太郎」の冒頭の一文は、次のように簡略である。

「むかし、浦島太郎といふ人がありました。」

尚、森林太郎らによる『標準於伽文庫』は、中世の「御伽草子」の流れをくんでいるので、教科書の浦島説話より詳しく、

「むかし、丹後の国の水の江に、浦島太郎というりようしがいました。毎日毎日海で魚を釣って、おとうさんとおかあさんをやしなっていました。」

と述べている。

このように、浦島説話の設定について、三つの浦島説話を比較してみると、丹後国の漁夫であることは変わらないが、古代では、浦島の話が史実、または伝説としてより詳しく記述され、中世でより一般的な「浦島太郎」という名を主人公に与えられたところから、いわゆる御伽噺として、浦島は史実から解き放された形で発展し、今日に至っていると言えるであろう。

b　異郷訪問の要因

浦島説話は、異郷訪問譚として知られている。浦島が異郷を訪問するまでのくだりを比較しながら、なぜ浦島が異郷を訪れることになったのかを考えてみたい。

古代では、④独り小舟に乗って釣に出かけた。⑤三日三夜、魚が釣れず、遂に霊亀を得た。⑥なし。⑦嶋子が舟中で眠っているうちに、亀は美女に化した。神女は、私は不死長生の蓬山の女だと名のり、前世から夫婦の約があると説き、蓬山に誘う。となっている。嶋子が蓬山へ向かう直接の原因は、亀が変じた美女の求婚である、ともとれる話になっている。つまり、神女が亀に変身して嶋子に釣られ、そこで元の神女に戻り、自分と嶋子の縁を説く。そして、二人で暮らすべく蓬山へ向かう。なんとも神女のおしかけ女房的な話であるが、では、なぜ神女が嶋子を選んだのであろうか。これに答える記述は見あたらない。ただ、『丹後国風土記逸文』にだけは、嶋子は、「為人、姿容秀美しく、風流なること類なかりき。」とある。が、これは他の古代の浦島説話と比べて特殊な記述なので、古代の標準的な嶋子像とは言い難い。

従って、古代浦島説話では、神女の求婚によって嶋子は蓬山へ向かうことになるが、嶋子自身に蓬山を訪れ得る要因はなかったと言

えるのではないだろうか。宋代の陶淵明による『桃花源記』の桃源境訪問や、唐代の張鷟による『遊仙窟』の仙境訪問を持ち出すまでもなく、この時代は仙境訪問には特別なパスポート（資格）は必要でなく、誰でもふとしたことから迷いこむ、あるいは訪れることができると考えられていたのであろう。けれども、再び同じ人が訪れることは許されない世界でもあったわけである。このような不思議な不老不死の仙境を、嶋子は神女の求婚によって幸運にも訪れたことから古代の浦島説話は始まっている。

ところが、中世になると、浦島の異郷訪問の要因に関する考え方は大きく変化を遂げる。④ある日、釣に出かけた。⑤ゑしまが磯で亀を一匹釣り上げた。⑥浦島太郎は「おまえは寿命の長いものだ。」と言って、亀を海に放してやった。⑦翌日、釣に出ると、美女の乗った小船が流れよった。その女房は、本国に送ってほしいと浦島に頼む。このように、中世では新しく動物報恩譚が付け加わっている。一般的に、動物報恩譚は古くからある。たとえば、平安時代の『日本霊異記』の中に、「蟹満寺縁起」があるし、それを亀に限定すると、同じく『日本霊異記』に「亀を贖ひて放生せしめ現報を得る縁」（『今昔物語』に類話あり）がある。また、『打聞集』の「銭亀買人事」もよく知られている。

このように、古くから亀の報恩譚が存在したにもかかわらず、古代浦島説話の亀と嶋子は、報恩の関係からではなく、最初から夫婦となる約束で仙境へ向かっている。つまり、古代浦島説話は、動物報恩譚とは無関係に成立し、中世に至って、浦島説話に動物報恩のモチーフが新しく加わったと言えるだろう。古代では誰でもふとしたことから訪れることができた仙郷であるが、中世では動物を助けるという功徳に対する報恩として、竜宮城へのパスポートを得た者が訪れ得るという、ある意味では筋の通った合理的な話へと変わってきているのである。

近代では、中世と同様、動物報恩により竜宮城を訪れるのであるが、亀の助け方がさらに積極的に表現されている。④ある日、釣に出かけてはまべを通っていると、⑤子どもたちが一匹の亀をいじめていた。⑥浦島太郎はかわいそうに思って亀を買いとり、海へ放してやった。⑦二、三日後、浦島が舟で釣をしていると、大きな亀が近寄ってきた。亀は助けてもらったお礼を言い、竜宮へ誘う。このように、浦島は、子どもたちがはまべでいじめていた亀をわざわざ買いとって、海へ放してやる。また、亀の方も、中世では浦島が竜宮城を去る時になって、初めて報恩の意を告白するのであるが、近代では浦島を竜宮に誘う時に、早くも「おれいに竜宮へおつれしましょう。」と告げている。中世、近代とも、動物報恩を異郷へのパスポートとして赴くことになっているが、中世では浦島は亀の報恩と知らずに竜宮城へ向かうのに対して、近代では浦島自身、亀の報恩と承知の上で竜宮へ赴くのである。

c　亀と女

浦島説話に必ず登場するものとして亀と女がある。この女は、神女、美しい女房、乙姫さまと時代により変わるが、亀と女の関係もかなり変化してきている。そこで、この両者の関係を中心に変遷を追うことにする。

古代では、亀は仙郷の神女であった。神女が亀に化して嶋子に釣られ、舟中で元の神女の姿に戻り、嶋子に求婚するのである。この亀は、ただの亀ではなく、「霊亀」であったと記されている。そして、仙郷では神女は「亀比売」とも呼ばれていることから、古代浦島説話では、亀と女の結びつきが非常に強く、亀と神女は同一体で、時によって姿を亀に変えたり、女の姿に変えたりすることができたのかもしれない。とにかく、亀自身が霊的なものと考えられていた時代においては、まさに「亀比売」であり得たのだろう。

ところが、中世浦島説話では、亀が本性であり、翌日、小船に乗って現われた美しい女房は亀の化身であった。これは、浦島が帰郷するときになって、「自分はゑしまが磯で助けられた竜宮城の亀です。」と告白していることなどから察せられる。浦島がゑしまが磯で釣った亀は、古代のように霊亀ではなく、ただの亀であった。その亀の化身である女房も「美しき女房」であるものの、古代のように仙女のような雰囲気はない、古代浦島説話の特色であった神仙思想が、中世浦島説話では影をひそめてしまった結果と言えるだろう。このことは、亀と女についてだけではなく、異郷に対する考え方や、浦島説話全体の構成についても言えることである。

さて、近代に入ると、亀と女の関係はまた一段と変化を遂げる。古代、及び中世では、亀と女は同一体であり、ときによって亀の姿になったり女の姿になったりしていたが、近代浦島説話では、もはや亀と女は全く別個の存在となる。浦島太郎に助けられた亀は、説話全体を通じてただの亀である。そして、亀の背に乗り赴いた竜宮には、亀とは別に「乙姫さま」という女性がいたのである。つまり、古代、中世において未分化であった亀と女が、近代に至って、竜宮の家来としての亀と、竜宮の姫である乙姫さまの二者に分化してしまったと言えるだろう。

ところで、近代の浦島説話において、浦島太郎に対する亀自身の報恩の意も認められないことはないが、どちらかと言えば、亀の主人としての乙姫さまが、家来である亀を助けてもらったことに対して報恩の意を表わしているのではないかと思われる。従って、亀は乙姫さまの意志から、竜宮と現世との交通機関としての役割しか果たしていないようである。竜宮に着くと、浦島をもてなすのは、もはや亀ではなく、乙姫さまであり、その命を受けた鯛、たこ、鮃たちである。

このように、近代では亀と女は完全に分化し、二つの別の存在となった。と同時に、亀と女の役割分担が進んだようである。

d 異郷

浦島が訪れた異郷に関する描写に基づき、浦島説話における異郷観の変遷をたどってみたいと思う。

古代浦島説話では、⑧神女の言葉に従い目をつむっている間に、博く大きな嶋に着いた。⑨玉を敷いたような地に、りっぱな御殿があった。⑩門前で待つ嶋子を指して、通りがかった七人の豎子（昴）、八人の豎子（畢）が「亀比売の夫だ。」と言う。⑪神女は父母同胞と共に宴を催し、歌舞をもって嶋子を歓待した。宴後、神女と嶋子は夫婦の理を成した。⑫老いもせず、死にもせず、三年間暮らした。

このように、異郷の宮殿から出てきた豎子が、昴星や畢星であったりするのは、単に「海上の仙郷と、天上の仙郷とが奇妙に混同されている例」（水野祐氏）[注18]ではなく、海の世界と天界とが一体化したところから生まれた表現なのではないだろうか。つまり、海のかなたの、はるか水平線上に想定された異郷は、天界とも接していると考えられていたようである。[注18]

中世浦島説話では、⑧女房の教えのままに漕いで行くと十日余りで故里に着いた。⑨金や銀でつくられたりっぱな御殿があった。⑩なし。⑪女房と浦島は夫婦の契りを結んだ。女房は、ここは竜宮城だと告げ、四方の戸を開け、四季の景色を見せた。⑫楽しく暮らして三年が過ぎた。

中世に入っても、異郷への交通手段は船であるが、もはや女房は、浦島太郎の目を眠らせることもなく、沖の方へ十日余り漕いで行ったところに女房の故里があった。異郷の名称は、古代の蓬（萊）山から竜宮城に変わっている。その竜宮城で、浦島は時の経過を待たず、居ながらにして四季の景観を一度にながめるという妙味を味わう。

ところが、近代浦島説話では、⑧浦島が亀の背に乗ると、亀は海中にもぐり、しばらくすると竜宮に着いた。⑨珊瑚や真珠で飾られたりっぱな御殿があった。⑩なし。⑪乙姫さまが現われて亀の命を救ってくれた礼を言い、鯛や鮃の歌や踊りでもてなした。（四季の景色）⑫楽しさに帰ることも忘れ、（三年の）月日がたった。

このように、竜宮への交通機関は船から亀へと変化する。阪口保氏は、浦島が亀の背に乗って竜宮へ向った話は十八世紀の中ごろに誕生し、十九世紀初頭にはそれが十分に完成していたと推定しておられる。[注20] 近代になると、浦島を乗せた亀は、古代、中世のように、はるかかなたの海上の島を目ざしたのではなく、海中の竜宮をめざすべく、海の中へともぐっていったのである。それとともに、竜宮で浦島をもてなすのは亀ではなくて、乙姫であり、その命を受けた鯛や鮃や章魚である。亀は、は虫類であるが、普通は水陸いずれにも生活し、主として水中生活のものもある。異郷への交通機関が舟から亀へと変化した時に、亀のこのような生態が、竜宮を海上から

海中へと移動させる一因であったとも考えられるのではないだろうか。

e 結　末

いつの時代を通じても、浦島は両親を恋しく思い、望郷の念にかられて帰郷することになる。そして、開けてはならぬ玉手箱を開け、悲劇の老人と化してしまうのである。その結末までを追ってみると、古代浦島説話では、⑬沈みがちな嶋子を案ずる神女に答え、しばらく故郷に帰って両親に会ってきたいと言う。⑭神女は泣く泣くひきとめたが、きかないので、再逢の期を願うなら開けるな、と言って玉匣を授けた。⑮神女の教えどおり、目をつむると、舟は忽ち故郷に着いた。⑯淳和天皇、天長二年のことであった。⑰村邑のようすはすっかり変わっていた。⑱百有七歳の嫗が、水江浦嶋子のことは古老相傳のことで、三百余年も昔のことだと言った。郷里を廻ったが、親しい人には会わなかった。⑲嶋子は神女を恋しく思い、約束を忘れて玉匣を開けた。⑳中から紫雲が立ちのぼり、嶋子はたちまち翁となった。

中世浦島説話では、⑬浦島は、両親が気がかりだから、会ってきたいと三十日の暇を乞う。⑭女房は泣く泣くひきとめたが、きかないので、助けられた亀であることを告白し、形見に美しい箱を授けて、けっして開けるな、と言った。⑮はるかの波路を送って故里へ着いた。⑯なし。⑰故里は人跡絶えて荒れた野辺となっていた。⑱八千ばかりの翁が、それははや七百年以前のことだと答え、浦島の廟所を教えた。泣く泣く古塚に参り、一本の松の木陰に呆然と佇んでいた。⑲途方にくれた浦島は形見の箱を開けた。⑳紫雲が三すじのぼり、これを見るとたちまち翁となった。浦島は鶴と化し、亀と共に蓬萊の山にあひをなし、後、丹後国に浦島の明神として現われ、亀も夫婦の明神となった。

近代浦島説話では、⑬浦島は両親のことを思い、暇乞をする。⑭乙姫はしきりにとめたがきかないので、（もう一度、ここへ来たければ）開けるな、と言って、玉手箱を渡した。⑮亀の背に乗り、しばらくすると、海上へ出て、もとのはまべに着いた。⑯なし。⑰村のようすはすっかり変わり、知る人もいないのに驚いた。⑱（百七才のおばあさんが、それはもう三百年も前のことだと言った。）浦島は竜宮の三年が、この世の三百年にあたることに気づいた。⑲どうにかなるかもしれないと思って、浦島は玉手箱を開けた。⑳白煙が立ちのぼり、それがかかると、髪もひげも一度に白くなり、おじいさんになった。

4 結　び

以上のような古代、中世、近代の浦島説話を比較してみると、三様の浦島説話の特徴がそれぞれ浮き上がってくるように考えられる。まず、古代の浦島説話は、「草木みな能くもの言い、神が自

然の象徴として異類の姿を借りていた時代の話であり、神女である亀比売と嶋子との間の神人通婚談の形になっている。もっとも、天と海との接する所にあると考えられていた異郷は、「不死長生の蓬山」と語られ、三年間の逗留をことさらに「老いもせず死にもせず」と記述するなど、中国の神仙思想の影響の跡が著しい。帰郷する嶋子に対して神女が「再逢を期し」て贈った玉匣には、嶋子の老と死とが封じ込められていたのであり、タブーを守って開けさえしなければこの世においても嶋子は長生不死でありえたはずである。要するに、古代浦島説話は、まさに神仙談もしくは神仙境滞留談として規定すべきものであったのである。

ところが、中世の浦島説話では、釣り上げた亀を放生するという要素が加わったことで、両者の婚姻の由縁が報恩談ふうに転化し、昔話の「鶴女房」や「はまぐり女房」などのような異類女房談を思い起こさせるものになっている。人間に助けてもらった異類が、普通だったら嫁を迎えることなどできそうにない貧しい無能な男のもとに、嫁にしてくれと言って訪れ、しかも、はまぐりの場合には料理の上手な、鶴のときには珍しい織物を織るというように、それぞれ異類としての本性に関係した形で、すばらしい嫁となって男に幸福をもたらすという話である。浦島説話の場合は、女がこの世の男の家を訪れるのではなく、女の本国竜宮城に伴う形になっており、そこでの幸福な生活というのが、居ながらにして四季の風景をながめることができるというような貴族趣味的なものになっている点で、違ったものになっているが、報恩のための婚姻という意味では同じとみてよいだろう。ただ、一般の異類女房談が、見るなのタブーを犯して、異類としての姿を見、妻の本性を知ってしまった時に、女が本来の姿に戻って行くという結末をとることが多いのに対して、この話では、故郷に残してきた両親を案じて一時の帰郷を切望する浦島太郎にむかって、女は自分から助けられた亀であると本性を名のった上で、「開けるな」のタブーを課して形見の箱を渡すことになっており、変わり果てた故郷の様子に途方にくれた浦島太郎が、妻のもとに戻りたいと思って、箱を開けた、すなわち、そのタブーを犯したために、自分は一瞬に老翁と化し、竜宮への復帰もできなくなったという結末になっている。タブーを犯して女の本性を知ってしまったためにではなく、タブーを犯して不老不死の世界へのパスポートを失ったが故に破鏡の悲劇を招いた結果になっているのである。つけ加えられた鶴亀明神縁起談は、悲劇の結末をもう一度逆転して長生祝儀談に返そうとするものであるが、物語の展開とはほとんど無縁であるといってよいだろう。

近代における浦島説話になると、浦島太郎は子どもたちにいじめられている亀を買い求めて放してやる。しかも、その浦島太郎の恩に報いる主体は、家来を助けられた竜宮の乙姫様ということになり、婚姻談は全く姿を消してしまっている。ここに至って、浦島説

話は純然たる報恩談になってしまったといってよいだろう。それにしても、これは報恩といえるのかどうか首をかしげたくなるようなひどいしうちであるように思われる。珊瑚や真珠で飾られたりつばな御殿で、鯛や鮃の歌や踊りでごちそうを供せられるところまではまだよい。故郷に戻ってみたら、知らぬ間に歳月が過ぎていて、浦島太郎は見も知らぬ世界にたった一人でほうり出されてしまった結果になっている。いくら開けるなと言われたからといって、これを開ければ故郷がもとの姿に戻るのではないかと考えて、浦島太郎が玉手箱を開けてしまうのを誰がとがめることができようか。なのに、浦島太郎は一瞬におじいさんになってしまう。これでは青年浦島太郎は、余生の全てを一時の歓楽に取り替えられてしまったことになる。このようなことが報恩であり得るのか否か、全く疑問である。なぜ、このような気の毒な結末になってしまったのかを考えてみると、子ども向けの童話として不適切な亀との婚姻を取り除いてしまったことに原因があるように思われる。なまじ竜宮が不老不死の世界であったことだけを受けつごうとしたことも関係しているようである。

昔話や伝説の世界では、話の筋を構成する要素だけが変わることなく語りつがれていくといわれる。浦島説話においても、古代、中世、近代と話が移り変わりながら、変わらない要素もたしかにあるように見受けられる。だが、一面から見ればそれ故に、他面から見れば、受けつぐはずの要素を人為的に恣意的に除去し去ったことの故に、このようなどう考えようもない、たんなる不思議なだけの話にまで転化させてしまったという他はなさそうである。あるいは、そうなってしまったのは、浦島説話が元来観念性の強い不老不死の仙境訪問談であったことに原因を求めるべきなのであろうか。

△追記▽　昨年八月十九日の国文学会で発表しました時、いくつかのご指摘をいただきました。それに基づいて結論の部分をもう一度考え直すことができましたことを付記してご教示いただいた諸先生にお礼を申し上げます。と共に、本稿の成立につきまして、ご懇篤なご投導を賜わりました難波喜造先生に感謝の意を表し、ここに厚く御礼申し上げます。

（注）

1　『日本唱歌集』岩波書店、昭和49年p172～173
2　『丹後国風土記逸文』、卜部懐賢『釈日本紀』所収
3　『万葉集』巻第九雑歌、一七四〇番、一七四一番
4　『日本書紀』巻第十四、雄略紀二十二年秋七月の条
5　『浦島子伝』、『群書類従』文筆部所収
6　『続浦島子伝記』、『群書類従』文筆部所収
7　『扶桑略記』、阿闍梨皇円編著、成立は一〇九四年以後
8　『水鏡』、第五十四代淳和天皇の条、『国史大系』21上所収

9 『古事談』、淳和天皇の条、『国史大系』18所収
10 『浦島神絵巻』、丹後・宇良神社
11 『うらしま古絵巻』、『室町時代物語大成』（角川書店、昭和49年）所収
12 『うらしま室町末絵巻』、『室町時代物語大成』所収
13 『うらしま奈良絵巻』、『室町時代物語大成』所収
14 『御伽草子』、近世、渋川清右衛門らが板行した叢書
15 『標準於伽文庫』、森林太郎他三名撰、培風館、大正9年～10年
16 『小学国語読本』、日本書籍、昭和十三年、p107～121
17 （ ）の中は、『標準於伽文庫』にのみ見られる表現を示す。
18 『古代社会と浦島伝説』（上）水野祐、雄山閣、昭和五十年、P56
19 竜宮城と蜃気楼の現象を結びつけて、中沢毅一氏は、竜宮城の在所の一つを富山湾と推定している。（「竜宮城の真相」中沢毅一・東京朝日新聞、昭和4年4月19日掲載）
20 『浦島説話の研究』、阪口保、新元社、昭和30年

（堺市立北八下小学校教諭）

会員著書紹介

国語教育実践叢書『楽しい作文教室』　柳瀬真子著

本書は経験学識ともに豊かな奈良市立西大寺北小学校教頭である著者による、教室実践と確固たる表現指導理論を背景にした文章作りのアイデァにみちた、作文指導書としてユニークな著作である。

現場一般の作文指導不振の現状に対し、樺島忠夫著『文章工学による新しい作文』のブレーンストーミング法を参考に、著者は次々と指導法を開発し、豊かに楽しい作文の実作教室を作り上げていった。そのおもなものが、指導案・指導計画と方法・生徒の実作実例・評価処理などの具体的記述によって、後進者を開眼させる。

本書の特色の一端を示してみると、たとえば、内容において、

第一章　短作文でこんなことを……。パロディを作る（百人一首ほか）。四コマ漫画の技法をコント創作に　。徒然草を四コマ漫画に　。絵をつないで連想し、短編物語を

第二章　古典に親しむ表現学習のすすめ……。「俊寛物語」を書く　。古歌の心を、会話文の創作や、歌謡曲スタイルにアレンジ　。漢詩の心を口語詩に

初めの二章だけでも右のようである。以下「文学作品の理解から表現へ」「生活記録」「楽しい創作活動」「意見文・感想文」など多彩である。　〈第一法規・A5版・426ページ・二、五〇〇円〉